

意見交換の概要
(令和3年11月18日(木)・砥部町文化センター)

1. 人手不足対策について

高齢者総合福祉施設に勤務している。

どの業種でも人手不足が問題となっているが、介護の現場はAIに頼ることが難しく、人手不足の解消のために、外国人技能実習生を採用している施設もあるが、施設側に求められる条件、ハードルが高いと感じており、二の足を踏んでいる。そこで愛媛県全体で見ると、介護の技能実習生を採用されている施設がどれぐらいあるか。今後、技能実習生が増えていくと思われるかお聞きしたい。

ハードルが高いなと感じている内容は、技能実習指導員、生活指導員という職員を施設の方で選任しないといけないので負担が大きいこと。また、技能実習生の宿舍、礼金、敷金とか、家電用品、食器まで全て用意しなければならない、人件費が日本人と同等のため費用負担の上乗せになるうえ日本語の指導も時間外に職員が請け負わないといけないこと。そのほか、人員配置基準で、給料は日本人と同等なのに、日本語検定、N3から4であれば6カ月間は常勤換算に入れられないなど細かい条件があるうえ、組合に支払う費用が発生するなど、数年先のことを思うと不安に思っている。

求人は基本的にハローワークに出しているが、応募も厳しく、なかなかない。また、人材紹介会社を利用すると手数料が非常に高く、採用しても半年でやめた場合、支払った手数料が一切戻らない。

愛媛県として、介護人材確保のために様々な施策を実施されていると思うが、このような問題を、解決できるような策を導入する予定はあるか。

【知事】

これは実は県レベルだけで解決できるようなものではないことになろうかと思います。特に外国人技能実習生の問題については、全国的な統一ルールの下で、様々な手続き面、あるいは、今お話のあったルールというものが決められてしまっているんで、その改善を常に求めていくというふうなことを、国に対して行わなければならないというふうに思っています。

例えば、実習生の期間が当初2年だったんで短すぎるじゃないかっていうのは、かなり長きにわたって、知事会としても要請し、今伸びてきたっていう経緯もございます。

それから、実習が終わった後に強制的に帰る。残る場合は、資格試験で合格しなければならないという制度になってたんですが、実はこの資格試験も、当初はですね、日本語のみでの受験というふうに縛られていました。で、介護でそこまでの語学力というのは必要がないという前提で、試験については、知事会としては、現場の声を聞いて、英語ないしは母国語での受験もやるべきだというようなことを数年間にわたって言い続けて、ようやくこれが一部変わったところでございます。

ですから、今お話しがあった、現場での課題、実は厚生労働省なんかはですね、全国統一のルールづくりは得意であっても、ただそれは霞が関のビルの中の会議室で考えてることばかりですから、ほとんど現場視点がないんです。だから、我々もそのより近いところから意見をいただき、なるほどと思ったことは改善をするということにつなげていくということを粘り強くやっていくしかないんで、今後とも意見はどんどん寄せていただければというふうに思っています。

現実、人数についてはちょっと私の方がそこまで分からないんで、担当の方からお話させていただきますけども、外国人技能実習生、これ介護に関わるだけのことではないんですが、ルートとして、簡単に言えば二つあって、県が、例えば、ベトナム、あるいはそうですね、中国等その

エリアの州政府、地域政府と、あるいは、場合によっては、この前カンボジアのときは国、国によってまた受けとめ方が違うんですけども、そこを正式な協定を結ぶようにしています。何でその協定を結ぶかっていうと、向こうから送り出しの機関を決めていただくと。こちらでは、受け入れる機関を決めていただくと。いわゆる正規ルートみたいなもんですね。そこをしっかりとした道筋をつけた場合に、例えば受け入れ機関と送り出し機関でも話し合いますから、来る前にある程度の日本語を学習しておいてくれと、いろんなやりとりをいたします。また受け入れる側に送り出し機関の方はそういった人材育成を事前にある程度やっていたとということをし、そして受け入れる側の方は、これ経済団体なんですけど、愛媛県中小企業団体中央会になってるんですけども、企業が中心になりますが、これ介護も多分入っていると思います。で、受け入れる方がそれを会員の団体にしっかりとつないで、対応についても相手さんに対してしっかりみますよ、というふうなことで向こうも安心して送らせると。ここはあまりトラブル起こってないんですよ。よく起こるのは民間の、今お話のあった機関がやる場合に、我々も分からないんですね。その部分がどういうふうなところでどう引っ張ってきているのか。こういうところで大体よくあるのが、給料が支払われてないとか、劣悪な環境で働かされてるとか、あるいは技能実習なんか全くやられてないとかですね、これがよくニュースになる。これは正規ルートじゃないところで発生するというふうな考えられた方がいいかなと。だから民間を使う場合も、いい企業と無責任な企業がありますので、そこは十分注意が必要ではないかなというふうに思います。

いずれにしても日本の場合、少子高齢化が進んで人口はどんどん減少していきます。愛媛県も今、出生率がこのまま続いて何も対策を打たない場合、あと14、5年経つとですね、現在130万人で大体毎年、社会減、あるいは自然減で移住、出生、それらを全部トータルすると、今現在、年間8,000人ぐらいずつ減ってきてるんです。現在133万人から4万人、かつて153万人ぐらいありましたから、これが100万人切ると。これ、どこの県でもそうですけど、首都圏以外はもう全部そういう傾向になるだろうという予測が出てます。そのために、出生率を上げる、あるいは流入人口を増やす、流出人口を食い止めるという三つの視点で政策を展開していくことで人口減少を抑えようとしているんですけども、そう簡単ではありません。その土台となる少子化が特に深刻なんですけども、働き手がいなくなるということで、ここを何とかしないといけないと。これは全産業で人手不足になるのはもう避けられないということが前提にあります。それをカバーするには、やはり外国人を含めた人材確保っていうのはやっていかなきゃいけないんですけども、さっきの介護だけじゃなくて他もそうなんですけど、日本の国ってのは、移住はともかく押さえるという前提で政策をずっとやってきた国なんで、本当に入りづらい制度が、障壁がものすごく高くなってですね。だから、ここはもう国全体として人口減少というふうなことも踏まえて、この障壁、このままでいいのかどうかっていうのは、もう大きな議論をしなきゃいけないっていう時を迎えているんで、県の立場としては国に対してそういったことを、どんどんどんどん声高に言うということはお約束させていただきたいというふうに思います。

もう1点は国内の人材確保は今申し上げたように、絶対数、人数が減っているということと、それからやっぱり何といても報酬単価の問題があって、そこにより多く居られるのかどうか、やりがいを感じていても、そこがどうなのかっていうところがどうしてもネックになるんで、今、国の方でもそこは考えるというような方針を出してきてますんで、そこはもう期待をするしかないかなというふうには思ってますけども、そこが解決しないとなかなか人材を確保するっていうのは難しいだろうなというふうに思ってますんで、この点も、看護師さんなんかも含めてですね、要請事項として言い続けていきたいというふうに思ってます。以上です。

＜後日回答＞〔保健福祉部〕

愛媛県全体で介護の技能実習生を採用されている施設：現在、119の施設や病院
技能実習生数：300名以上が実習に励まれています。

《補足説明》〔保健福祉部〕

外国の国籍の方（外国の国籍であった方を含む）には、受験申込時の申請により、全ての漢字にふりがなを付記した問題用紙と通常の問題用紙が配付され、試験時間が通常の1.5倍となっています。加えて、EPA介護福祉士候補者の方には、疾病名等への英語の併記等の配慮がされています。

2. 間伐補助の評価方法、木材の安定供給について

林業の方、所有者及び事業者に対しての補助金に関して少し疑問があるので、お聞きしたい。
まず、間伐補助の評価方法について、今、間伐とか他の植え込みなどをしたときに、補助金を出していただいている。その評価の基準が、材積や面積の評価で補助の金額を決めていただいているが、これによって、例えば、本当はそんなに伐らなくてもいいのに、補助金もらうためには3割伐らなければもらえないから伐ろうとか、山じゃなくてこの補助金ベースでの整理をちらほら見かける。これを材積とか面積ではなく、森林の評価として、いい山を作ったから補助金をあげるよっていう仕組みがいいと思うが、その物差しがすごく難しいのは分かっているので、いい案があったらお聞きしたい。

それから、近年言われている木材の安定供給について、どこを基準に目指しているのか。例えば製材さんの満足する量の材を出すことが安定供給なのか、森林の成長量、1年間の成長量に対してどれだけ伐っていいのか、もしくは業者がどれだけ出していくべきなのかという基準が、製材ベースで安定供給してくれて言われているように聞こえる。それがもし、愛媛県の森林の成長量より製材さんが欲している材積が上回ってしまった場合、いつまでも続く産業ではなくなってしまうんじゃないかなと感じているので、その安定供給を、どこ基準でやっていくべきなのか。大型化してくれ、プロセッサを入れてくれとかフォワード入れてくれとか、再々言われているが、新規で入ってくる業者が全員、大規模林業になったときに、本当に安定的に供給できるのか。事業を拡大したい気持ちはあるが、材積森林量というものを加味して、どこをベースに仕事をしていったらいいのかお聞きしたい。

【知事】

僕は専門家ではないので大ざっぱなことしか答えられないと思いますけども、まず間伐についてはですね、安定供給とも絡んでくるんですけども、実は数年前は逆に全然売れなくてですね、単価も、採算ラインが9,000円だとすると、杉でも、9,000円か1万円ぐらいで、ヒノキでも1万2,000円ぐらいで、非常に厳しい状況がずっと続いてました。その背景には、ツーバイフォーをはじめとする外材の価格競争力に太刀打ちできないということで、要は伐っても売れないという状況が続いて苦労してたのが当時だったんですね。

そんな中、それでも県の皆さん頑張ってくれて、実は数年前までは、ヒノキの生産量は愛媛県は全国1位でありました。ところがある時3位に落ちて、一体これ何なんだろうっていうことを調べていくと、ある県では、上位の県では主伐をどんどん始めてると。愛媛県も、ちょっと林業を全体的な山の成長具合を見ますから、ちょうど今が主伐の時期に入ってきているんで、うちもやるぞと。ただし他の県を見ると、もう民間主導で主伐だけやってあと知らないっていうことをやって、これじゃ駄目だと。次なる循環をつくれないといけないんで、愛媛県はその当時、「林業活性化プロジェクト」っていうのを立ち上げて、その時は山の持ち主、製材所、それから販売関係者、一堂に会してフリーディスカッションを行いました。で、実はそういう会自体が初めてだったということで、その中でそれぞれの立場で、いろんな問題点があるということをフリーディスカッションの中で出し合って、初めて共有することができたんですね。その中で、林業

の活性化プロジェクトっていうのを、5年計画で作って、今もう次なる第2次に入ってるんですが、その時にルール化したのは、主伐を行った場合、必ず植林をすると。そのための補助制度を出す。というようなことで、山をいいものを伐ってそのまま放置するんじゃなくて次のことを考えて植林をするっていう循環させるという仕組み。簡単に言うと、それが林業活性化プロジェクトのメインになっています。間伐についても、これについては、もう山を、よりよい木を生み出すためにはやらざるを得ないんで、これを計画的に行っていますけれども、その中でどういう評価でやるか、確かに今全体のことを考えると、面積とかそういったやらざるを得ない状況があるんだろうと思いますけれども、ちょっとこれ現場に聞いてみないとわかんないけども。

それ以外の、今言ったトータルの需給バランスの中でやったらどうかという御意見だと思うんですけど、僕自身はちょっとそこまでのことを、何がいいのかってのをまだちょっと話聞いただけでは思い浮かばないんですけども、これは議論していったらいいんじゃないかなというふうに。県としては全体的な森林面積、山の状況というのをトータルで見て、この年にどれだけのものが出荷できるのか、あるいは、これはできないかかってのは計算しながら、間伐等々もやってるはずですから、そこの効果、全体の効果、企業の1事業者としての視点と全体の視点と若干食い違いがあるのかもしれないんで、そのあたりちょっと聞いてみたいなというふうに思います。

で、安定供給、このあと間伐の安定供給に大いに結びついていくんですが、先ほど申し上げましたように、市場の動向によって供給体制がどうなのかってのは大きく変動すると思います。特に数年前までは先ほど申し上げたような外材との競争の問題があって、非常に売るということにもものすごく注力をつけて、私自身も東京や大阪の製材会社や市場であるとか製材に乗り込んで、「媛すぎ」、「媛ひのき」の実は名付け親は僕なんです。当時、愛媛県はいいヒノキの生産量日本一なのに、ブランドとしてイメージが湧かないんです。例えば、スギって言ったら屋久杉とか秋田杉ってのはすぐ誰も思い浮かぶ。ヒノキってのは木曽ヒノキとかそういうのをすぐに頭に浮かぶけど、生産量日本一の愛媛県のヒノキの名前って何って聞いたら、「ない」という状況だったんですね。森林関係者と懇談したときに「やっぱりそういうブランド化ってのはすごく大事で、規格品については名前つけたら。例えば、媛すぎ、媛ひのきとか、なんでもいいんじゃないの」って、そういう話をしたら「それはいいですね、持ち帰ります」って持ち帰って、1ヶ月後にまた来られて、「名前をつけることにしました」「何にしたの」って言ったら、僕が言った「媛すぎ、媛ひのきにそのまま活用させていただきます」ということで、規格品については今、「媛すぎ」、「媛ひのき」っていう名前がついたという背景があります。

そういう中でいろんな住宅会社にも売り込みに行ったりしてたんですが、状況がここ数年、去年からガラッと変わってですね、いわゆるウッドショック。昨日もテレビでやってましたけど、今、海外では、10メートル20メートル級の木材建築、これSDGsの関係もあるんでしょう。脱炭素社会の流れの中でですね、木材需要が急激に上がってきている。という中で、愛媛でも一部CLTの生産も、製材の方始まっていますけども、全く市場が変わってくる可能性が出てきたんですね。そうすると、安定供給という基準自体が、市場が求めている量そのものが大幅に変わっていくと、安定供給という概念自体がガラッと基準が変わってしまうという状況なんで、この読みは非常に難しいと思います。僕は石油の仕事をやってたんですけども、需給状況っていうのはもう本当に読み違えるとえらいことになって、安定供給というものを念頭に置きつつその年年の需要によってもう全く状況は一変してしまうんで、毎年これは悩みながらやっていくしかないかなと。

ただ、長い目で見ると、今言ったような世界的な方向性と、それから外材との今価格競争力もできてきましたんで、現在、スギも1万4、5千円まで来てるかな。ヒノキは2万円を超えるような状況になってますから、採算的にも十分合う状況が揃っている。でもここで、さっき言ったように儲かるからと言ってバッサバッサやってたら、そのあとが続きませんから、そこは全体像を常に見ながら愛媛県の森林を管理するという観点と、それから現状の需要動向というものを両方

ミックスさせながら、供給計画するのは、業界と話し合いながら進めていきたいというふうに思っています。

なんか現場の方から。

(久万高原森林林業課長)

今回の安定供給ということですね、需要と供給ということがやっぱり当然出てくるんです。木材産業、製材業が盛んになれば、関連する木材の需要も高まってくる。愛媛県は製材業も非常に盛んな県でございまして、全国で第6位の木材の県でございまして。そこでですね、県内の成長量というのが大体86万立方、年間でございます。で、今生産されているのが、昨年で52万3,000立方メートル、ということでございますので、生産量に関しては、まだというか、そういうところで、足りないところを県外から買っているという現状、そういう事情もございまして、この86万立方の中で、どんどん県産品を出していただきたいと思います。それによって資源が枯渇することはないと考えています。

(参加者)

一つだけいいですか。成長量が86万立方の中で、利用可能な森林ですよ。他の、例えば広葉樹が生えているとか、伐採できないところも含めての86万立方ですか。

(久万高原森林林業課長)

この86万立方というのは、人工林の成長量でございます。ですので、道がないところは確かに道をつけながら、先輩たちが、50年前、60年前に植えて育てた山の、スギ、ヒノキの人工林の成長量でございます。

3. 障子山の整備、マウンテンバイクの普及について

ここから障子山はちょっと見えないけれど、愛媛に来た時、「みんな、石鎚山に登りましょう」と言って、22回ぐらい登りました。けれども、砥部に引越して、ちょうど窓の前に障子山があったので登ったら、すっごく楽しかったので、友達も連れてきて、みんなで何回も登った。一番の問題は、ここ（障子山）からは何も見えない。昔40、50年前に登った人が「前は木はなく、ちゃんと瀬戸内海や堀江まできれいに全部見えていた。けれども、今は木が大きくなって何も見えない」と。

砥部小学校の6年生は、毎年登る。私は2回、息子と登りました。けれども、いまだに何も見えなかったのがちょっと寂しく思っている。だから、何かビューポイントとか、きれいに見えるようにしてほしい。障子山は松山市からは半日で来て、1時間で簡単に登れ、楽しく過ごせる場所。今はコロナで、あまりどこにでも行けなくて、石鎚山には人がたくさんいるが、ここは楽しく登れる。

また、コロナだから、人が多いところには行けない。周りに山がたくさんあるのでマウンテンバイクがしたい。私の知っている人は、内子と小田深山で生活しているが、(周りの)人を知らなくて分からないから、お手伝いしたい。

【知事】

障子山、ちょっとこれも分からないんだけど、自然公園っていう、一つの枠がかかった場所にある山になってるそうなので、ここを整備する場合はですね、かなり手続きがいるらしいんですね。例えば、土地や木の所有者の同意を取る、それぞれ持っている方。それから地元の市町の協力。だから、おそらく、どの愛媛県内の他の町でもですね、散策コースを作っているところはあります。だからできないというわけではないんだけど、それは今日は（砥部町の方が）来られてるかどうかわかんないけれども、砥部町のまちづくりの中で、それどういうふうを活用する

のかってという計画を作ることからスタートかなと。それは、地元の有志の方でもいいですし、地域の方々と砥部町で話し合いをもたれて地元の方も巻き込んで、ではここをハイキングコースにしようよとか、そういう計画ができるって県がお手伝いできるっていうことになるのかなというふうに思います。

例えば、小っちゃい町ですけど松野町ってところがあって、そこはもう松野町が、その裏にある山をハイキングコースにっていうことで、眺望を入れるために木を伐ったりとやってるところもありますんで、そういう事例も参考にしながらやられたらいいんじゃないかなと。

僕は松山市の仕事をしてる時も、淡路ヶ峠っていうのがあるんですけど、ここが一番下に松山城が見えて、その向こうが瀬戸内海っていう絶景の空間で、昔そこは砦だったんです。敵が来るのを見守るところだったんだけど、誰も登ってなかったんで、地元の人と話し合いながらハイキングコースを作って、てっぺんのところはベンチとか置くような状況になった。同じような形で、松山市としてどういうふうにするかっていうのを決めてやったという経験があるんで、そういうアプローチがいいんじゃないかなというふうに思います。

それからマウンテンバイクも同じように、その地域で本格的にやるのかどうかってのは決めないと動きようがないんですが、県内で言うと、八幡浜市に市を挙げてマウンテンバイクのコースを作っているところがあります。ここは年にいっぺん、世界大会も本格的な世界大会も開いているところ。それからもう一つは松山市の五明というところ、これは本格的なコースではないんだけど、キャンプ場になってるんで、そこを楽しく走れるぐらいのコースを作るってのは松山市の方でやってる。で、八幡浜市の場合は、もうこれ本格的なコース、大会が開けるようなコースを作るというので全然ジャンルが違うんですけども、かなり本格的なものをやっています。で、こういうときに、愛媛県、サイクリングが盛んなところなんで、非常にプロライダーなんかいますんで、そういうところの意見を聞きながら、どの程度本格的にやるのか、それとも楽しく走るのか、方向性が決まる。それを町としてどう位置づけるのかっていうふうなところのステップがあると、実現する可能性はゼロではない、というふうに思います。

(参加者)

障子山の話、なんか、ちょっと（町に）言いに行きましたけど、山は半分伊予市、半分は砥部町ということなんで、この場合はどうしたらいいですか。

【知事】

逆に、砥部町がいいなってことになったら、伊予市と話し合いができるってことだと思いますね。

(参加者)

ありがとうございました。

4. 演劇・映画等について

私はスロバキアから来た。スロバキアにはオペラハウスがあり、シアターも演劇もたくさんあって、毎日どこでもいつでも観れるが愛媛は少ない。3年位前に、砥部ミュージカルに娘も出て、すごく楽しくて、友達も観に来た。このミュージカルの話全然知らない方がいて、こんなにいい場所をみんなに紹介したいから、愛媛でプロモーションがしたい。

また、私の父はもう亡くなったが、映画を作るカメラマンディレクターだった。父が砥部に来たとき、砥部焼を見て面白くて、全然日本語しゃべれないけど、砥部焼の方と話したらすごい面白かったと言っていた。何が大事か、なぜここで砥部焼ができるのか、その違いを誰も知らない。その良さを日本だけでなく外国の人にも教えたい。

【知事】

オペラハウスはなかなか文化の違いもあるので、難しいなとは思いますが、例えばヨーロッパは本当に音楽が、クラシックが盛んですから、ヨーロッパの各国どこいっても、街中でバイオリン弾いたり、いろんな方が自由自在に演奏してる風景が定着してて、どの街にもそれらを受けとめた裾野が広いですから、オペラハウス等々があって、それはもう独特の文化の出せる技かなというふうに思うので、日本で、じゃオペラハウスがそこらじゅうかって言うと、そこまでの状況ではない。

ただ一方で、坊っちゃん劇場とかですね、松山市で毎年ずっとやってる市民ミュージカルとか、そういうものがあるんで、そういったところを後押しするってのは県の方でもやってますんで、小さな劇場も含めてそのファンが増えてくるっていうのが一番大事だと思いますから、そこから必要とする人たちが増えてくる。そうすると、建物造ろうかっていうふうになるんで。とりあえずは既存のところ、地道な活動が広がっていくっていうことが大事なのではないかなというふうに思います。

それから映画についても、愛媛県はもともと映画界に貢献した昔の方々が多く出ている県です。日本の映画ですね、特に映画が日本に入ってきた頃、もう数十年前、その時に活躍した人たちが愛媛県にたくさんいらしたんで、そういったことがあまり知られていない、忘れられていたということで、3年前から国際映画祭っていうのを始めてます。コロナでちょっと去年できなかったんですけども、今の一番世界的にも人気のあるハワイの映画祭とタイアップしながら進めるというような状況になってきてまして、その映画祭では、もちろん既存の作品を見ていただく機会でもあり、それから、今、いろんな機器、映画を撮る、あるいは編集する、そういったものも気軽に手に入りますから、それこそスマホでもできる加工もできるような時代なんで、素材を提供して、その素材の中から、短編の動画作りませんか、っていうコンテストも同時並行してやっています。そういったような、ただ単に好きな人を見るだけではなくて、次の世代が作る楽しさも味わえるような、映画祭として成長させていくことができたかなというふうに思ってます。これはまだ緒についたばかり、始めたばかりですから、今後に期待していただきたいというふうに思います。

5. 産後ケアについて

ピアは、仲間という意味で、当事者同士が話すことによって自己肯定感を上げていく活動で、その集まれる場所を作る活動をしている。今年度は、乳幼児のお母さん向けに力を入れている。

乳幼児のお母さんは、出産後のホルモンの変化で「産後うつ」、精神的な負荷がかかりやすいのはよく知られている。もともと負荷が高いところにコロナが来て、産婦人科でも、両親学級や助産師外来がかなり減らされ、呼吸法の教室もなくなっている。病院側から情報の提供はあるが、もっと具体的に個人個人の質問に対して答えてあげられるような機会が減っていて、余計に不安になったり、孤独になったりという状況が増えている。また、出産の現場においても、立ち会いができないとか、面会ができない、と。そういう中でもどんどん負荷は増えて、産後うつの可能性は増えていると言われてる。お母さんたちの負荷を軽くしてあげたいということで、乳幼児のお母さんたちが集まれるようなオンラインもしている。産んだ後も、コロナのせいで児童館や支援センターが閉まったとか、誰かと交流できないことによってさらに孤独になっていく。私たちがやるところに来てくれるお母さんは、自分で動くことができる割と元気なお母さんたちだと思うが、そういうお母さんたちですら、「孤独だ」という話をされるので、そういった孤独をどう軽くしてあげられるのかを考えながら活動している。

県として産後ケア事業をされていると思うが、心の負担を軽くしたり、体の負担も含めて、お

母さんの負担を軽くするための事業を、どれぐらいやったださるのか。乳幼児のお母さんたちに対して「愛媛県は子育てしやすい県ですよ」と言って欲しいが、県としてどういう形でその乳幼児のお母さんたちをケアしていく、サポートしていく体制があるのかをお伺いしたい。

【知事】

これちょっと現場の方からも答えてもらいたい。細かい事情については。僕の方からざっくりとしたことを申し上げますと、実は一番気にしてたのは、相談体制の充実だったんですね。特に、昔と違って三世代が一緒に住むというような形態が少なくなった。そして共働きが定着した。要は、暮らし方働き方が大幅に変わったことによって、昔だったら、身近なところに相談相手があった、あるいは、すぐにフォローしてくれる人がいたという状況がなくなってしまった。さらにこれに追い打ちをかけるように、特に、松山みたいな都市部では隣近所のつき合いすら希薄になった。これは東京なんか代表だけでも、お隣さんが何してる人か全然知らない。顔合わせた時に「こんにちは」ぐらいしかつき合いがないというのが当たり前になってしまった。ちょっと地方に行くと、まだ町内会とかコミュニティがあるので、そこはカバーできる空間があるんだけど、都市部では、もうそうはいかないんですね。例えば松山市の仕事をしてる時に驚いたんですけど、味酒校区というところがあって、ここは人口が逆に伸びているところですね。中心部だから、マンションがどんどん建って、人が増えている。3万人ぐらい、2万人以上いるんですよ。で小学校もどんどん小学生も増えてる校区だったんです。最新のデータ、ちょっと分かんないですけど。2万人をカバーするために、そこで消防団の方が何人ぐらいいらっしゃると思います、味酒校区。

（参加者）

1割ぐらいいらっしゃる。

【知事】

10人です。要はもう地域のコミュニティが崩壊してるんですよ。で、隣近所のつき合いも全然ないし。もう本当に文化祭とか運動会やっても、昔から住んでる人たちが集まるぐらいで、新しく来た人は全然出てこない。これはもうコミュニティ自体の問題を何とかしないといけないなと思ったんで、そこで関心を持ってくれる切り口は何かあったら、地域行事を案内しても出てこないんですね。防災だと。防災ということになると、自分1人では無理なんで、しかも自分や家族の命も関わるからってということで、防災の仕組みっていうのを、地域コミュニティ力で高めるといって自主防災組織ってのを呼びかけて、そこに防災士の資格を持った人を公費で育成して、その方をリーダーにした防災訓練について、防災訓練だったら行こうかって、そこで人と人の出会いがあって、おにぎりでも食べながら仲良くなって、「今度運動会があるからおいでよ」っていうね、コミュニティが少しずつでもいいから復活していけば、いろんな助け合いにつながるんじゃないかなと、そんなふうなことを考えていました。

で、そういうことは地道にやっていくしかないんだけど、こうした地域のコミュニティの育成ってのは、子育てにも役に立つという面があると。おせっかいな、いいおせっかいなおばちゃんとかいっぱいいますから。そういう人たちが、地域の隣近所のつき合いの中で相談できるようなことがあればいいんじゃないかなというのが1点。

それからもう1点は、相談体制、それでも今言ったような背景がありますから、相談件数が少し伸びてきたので、相談の体制の充実はちょっと今もやり続けてます。ただ、行政が相談所を設けても、今はもう時代が違うんで、役所そのもの、その施設そのもの、その相談所そのものの敷居が高いと感じる若いお母さんがいる。これをカバーするのに何かいい方法ないかなとって思いついたのが、スマホ流、ということで、愛媛県では子育て支援システム、「きらナビ」というのを数年前に作っています。この「きらナビ」はどんどん改定されていくソフトです。もともと

作る時に、県内の関係者の皆さん、子育てのお母さんや、学校の先生や、保育所の先生や、保健師の先生やいろんな方々に集まっていただいて、どういう相談アプリを作ったらいいのかっていうのはそれぞれの立場から意見を出していただいて、その上で構築した独自アプリなんです。で、例えば、これは、妊娠期から出産期、そのあとまで全部フォローしていくアプリなんで、出産予定日を入れていただくと、これは自動的に通知が来ます。『もう出産の何日前ですよ。今はこういうこと気をつけてくださいね、やっていますか』っていうのが、ポイントポイントで、何をすべきか、必要なものっていうのが、アドバイスして送られてくるシステムになっています。

それから、もう一つは、いろいろある子育てのサークル情報。要はその役所は敷居が高いから行けないけど、そこだったら見れる人たちがそれを見ながら、『今度何月何日どこどこで、ママ友サークルありますよ』と。そうすると、ちょっと自分と同じ世代だし、相談相手にもなりそうだから行ってみようかなっていう、そういったイベントとかいうか、集いの情報も定期的に入るようになっていきます。で、出産期、それから子育て期も含めて、今申し上げたように、それぞれに応じた必要な情報っていうのが提供されるのと同時に、それから、個人の相談っていうのは、また別ルート、その中から別ルートでこちらの方に御相談くださいっていうことで、対応できるような仕組みになってますんで、今何人ぐらい。

(中予地方局長)

現在、ダウンロード数で、1万2,000人ぐらい。

【知事】

もっと使っていただいているんじゃないかなというふうに思いますんで、ぜひこれは御紹介いただけたらなあ。で、改善する、こういうことやったらいいんじゃないかっていうのは、また御意見をいただいたら、なるほどと思ったことについては、例えばサービスを追加したりですね、改定したりということが十分やっていく体制になってますので、こういったことをやれば、いわば、今の若い世代、人付き合いが苦手、周りに身内がない、隣近所の付き合いがない、悩んでいるという人たちが、役所の事務所は敷居が高いから行けないけどスマホだったら簡単にできますから、そこに一つの窓口があるということは知っていただけたらなあというふうに思います。

あとは、現場の方から。

(中予地方局保健統括監)

失礼いたします。愛媛県中予保健所長の三木と申します。今現在、ピアの立場で、子育て支援に御尽力いただいております、大変ありがとうございます。お礼を申し上げたいと思います。お尋ねの件なんですけれども、確かにコロナでただでさえ心細いお母さんが、コロナの中で、子育てに苦しんでおられるんだろうなという事は理解できます。それで子育て支援といいますが、母子保健の主体というのは、今は各市町村になっておまして、保健所、県としては、各市町がどのような取り組みを行っておられるか、標準化したり連携をしたり、いろんな立場で関わらせていただいております。各市町の方でも、とても子育て支援が大切だということを理解しておまして、今行われているのが、赤ちゃんが生まれたら必ず全戸訪問をするよ、というような事業をされております。それから、産前産後のサポートなども行っておまして、訪問だけではなくて、御心配のことがあったらお電話をいただければ、本当にいろんなところから、いろんな人たちのサポートの手が行くような仕組みになっていると思います。訪問については、コロナの時期には、通常でしたら生まれたら直ぐお伺いするようになっていたんですけど、なかなかタイムリーな訪問ができないケースもあろうかと思っております。ですが、お電話いただきましたら御相談にのることはできますし、それから市町で難しいような事例は保健所も一緒に考えていきたいと思っております。あと、心のホットラインということで、コロナに特化したようないろんな御相談にのるようなホットラインもありますし、コロナ自体も御心配とかありましたら、保健所の感染症の方でいろんな御相談にのれると思いますので、1人で抱え込まずに、とにかく行政の方に御相談のお電話をいただければと思います。よろしくお願ひします。

(参加者)

ありがとうございます。おっしゃる通り、お母さんたち困っていることが多いんですけど、今教えていただいたことを知らない方もとても多くて、「きらきらナビ」も私も知ってるんですが、周りに知らないお母さんがたくさんいて、エミフルで遊ぶ場所が45分無料になるんだったら預けようとか、そういう使い方をされてる人が多いので、もうちょっと私も中身を見させてもらって、みんなに広げていきたいと思います。ありがとうございます。

6. ブランディングについて

地域を盛り上げていく団体というところで1点どうしても知りたいことがある。

中村知事になられてから本当に多くのブランディングをやられてきている。全国テレビに出て発信されていたりとか、今はまじめ課さんで「まじめえひめ」のホームページ等々発信されているが、われわれ団体でいろいろブランディングを試みて、いろんな取組みをしているが、やはりなかなか難しいのが現状だ。

例えば愛媛県でも、例えば伊予絃であつたらかれこれ出ているのに、ホームページ見ても出てこなかったりとか、知ってる人がすごく少ない点とか、特産品ではみかんが有名だが、キウイやアボガドなど、本当にもっと多くのブランド化されてもいいようなものがいっぱいあると思っている。

そういったことを発信する上でいろいろ考えられると思うので、今後、こんなことをしていったら、もっと愛媛県を盛り上げていこう、当然アフターコロナになったタイミングで、もっともっと観光客の方々も来ていろいろ見ていただいたりとかあると思うので、今後のブランディングに関する施策、お考えを聞かせていただきたい。

【知事】

いやそれが分かってたら楽なんだけどね。愛媛県ってのは素材としてはいいものをたくさん持っているけど、ブランディング、それから組み込み、それから、何ていうかな。悪なき執念みたいな、そこがすごい弱いなど、この仕事をいただくときに感じてました。これは、例えばですよ、真珠は日本一の生産なんて県民ですら知らなかった人が多いですよ。それは南予の方々がすごい奥ゆかしくて、玉は作るが一番収益の上がる加工は全部他県に持っていかれてる。で、結局、真珠っていうと三重や神戸ってのが浮かぶと思うんだけど、そういうところもあるし。あるいは佐田岬半島行くと、アジ、最近捕れないんだけど、アジやサバが大量に揚がって、豊後水道では大分の業者も愛媛の業者も同じものを釣って帰ってくるんだけど、同じアジやサバでも、豊後水道で揚がると、関アジ、関サバで、1匹4,000円、同じものが愛媛で揚がると、岬アジ、岬サバで2,500円と。こういうところがあって、「まあまあ食えるけんええがな」っていうようなところ。皆さん奥ゆかしくて、そういうブランディングっていうのがいまいち苦手なところがあるんだなあ。僕は商社なんで、そういうところで何かできないかなというふうには思っていました。

例えばいい例が、しまなみ海道の自転車については、10年計画でやったところなんですけど、日本で最も人気のあるサイクリングコースに育って、世界でも7大サイクリングルートの一つとして育ってきたんで、みかん以外にしまなみサイクリングってのも、われわれが思っている以上には世界のサイクリストの間では有名な空間になってきてます。場所が。

自分が考えたブランディングってのはさっきの木材で言えば、「媛すぎ」、「媛ひのき」。それから、養殖の魚もですね、天然の方がいいっていうようなイメージが世の中にあるんだけど、今は養殖の技術がものすごく高くなっていて、天然よりも養殖の方が価格が高かったり、あるいはそ

の肉質が良質だったりっていうのは出てきてるんですね。ところが養殖っていうイメージが広がって、なかなかそこ一步踏み出せないんでこんな話したんですよ。「考えてみてくださいよ。肉は、牛を飼っている畜産農家が手塩にかけて育てて良質なA5ランク。最近ではA4の方がいいっていうね、そういう肉を作って、養殖牛じゃないか」と。「養殖の牛が高級なんで魚も一緒です」と。「養殖をしている漁業関係者が手塩にかけて育てている。美味いに決まってるやん。名前が良くないんだ」と。「愛媛県では養殖っていう名前はやめて、「愛育フィッシュ」っていうふうにしよう」と。これは愛情込めて育てた魚と愛媛県の愛、愛媛で育った魚の両方かけ合わせて愛育フィッシュ。今愛育フィッシュブランドとして、まだまだですけど、ただこの良さ、徐々に浸透して、今は全国2位の回転寿司では、大々的に愛媛フェアをやるといような話もつきまして、愛育フィッシュのブランド魚の高まりにつなげていきたいなというふうに思っています。

ことさら左様にですね、いろんなことは考えてはいるんだけど、何が当たるか分かりません。やってみないと分かりません。全く駄目な時もありますし。全部当たるんだったら楽なことはいわけて、ただ、考えるときに、できるだけシンプルに伝えられるか、方向性が打ち出せるか。それからもう一つは、絶対に新しいものを出した時ってのは文句言う人が絶対出てくる。半分は文句言います。そこに落ちてはだめだと。そこで我慢をし続けると。結果ってのはいきなりなんか出っこないんで。スポーツでも何でもそうですよね。地道な練習をずっとやってて全く効果が出ないんだけど、ある日突然ポンと成長がある。逆のケースでいうとダイエットもそうです。毎日毎日一生懸命ダイエットに挑戦するんだけど、こういうふうには絶対ならない。全然変わらないじゃないかってのがいきなりドンとくる。物事全てそういうものだと思うんで、ブランディングの戦略を立てたときのスタートの時点というのが熟度と、それからスタートを切った後のその我慢の期間、ここをちゃんとくぐり抜けた時に、新たな道が開かれるということは常に考えてます。

だから、そういう観点でやってったらいいんじゃないかなと。ただ、分かりやすく、楽しそうっていう要素がないと、なかなか人は振り向いてくれないんじゃないかなというふうに思いますので、そのあたり参考になるかどうかかわかんないけど、意見として申し上げます。

(参加者)

ありがとうございます。しっかりと反映したいと思います。

7. 映画製作の支援について

まずは、今年5月に上映されました「未来へのかたち」、知事御出演ありがとうございました。素敵で、毎回ざわつくという印象的なシーンでした。

今回のような砥部や愛媛県を舞台とした映画、またドラマとか芸能作品や芸術作品について、アフターコロナを見据えてインバウンド誘致を進めるために、県として作品作りへの支援策などを考えていただけませんか。

もちろん、基準というのは設けた方がいい。「未来へのかたち」という映画に関していうと、オールロケ、出演者も有名な方々がいてというような。上映規模は、ある程度基準を満たしたところに、県のPRになるような作品について県も一緒になって盛り上げていただけたらと。今回、フィンランドの映画祭に初めて出展が決まり、現地時間の明日の夕方に上映されることが決まったが、海外の映画祭に出展するとか、今サイクリングで台湾の企業さんとのつながりがあると思うが、県が海外でPRする中に映画も組み込んでいただいたりとか。観光客を、アフターコロナでインバウンドのひとつの手段として使っていただけるようにできないかと思い提案したい。

また、芸術鑑賞券はすぐになくなったということだが、県内の方も、劇場が開放されて観れる

ようになってきたところで、興味もあると思っている。そういった鑑賞の場を作るところでの支援もあるといい。

【知事】

映画の製作っていうのは、本当に大変で、お金もかかるし、やってみないと当たるかどうかもわからないというところで、なかなか御苦労があるということは十分承知をしております。そういう中で、県のPRになるような作品に対してのタイアップについては、いろいろな観光プロモーションでの活用とか、いろいろなことに活用していくというのはできると思いますし、大いにやっていきたいと思っております。それとやっぱり国際映画祭にチャレンジする際の後押しとか何かあってもいいのかな、できないのかな、今あるわけではありませんけど、検討課題かなという感じがしました。問題は作品が作られたときに、意外と観光スポットになるんですよね。そういうのを活用すればいいんだけど、なかなかそういうところも奥ゆかしいところがあるのかな、愛媛県人ってのは。例えば梅津寺の駅の「東京ラブストーリー」なんか、今でもアジアの国では観られている作品ですから、「黄色いリボン結びにおいでよ」というアプローチがあってもいいんだろうし、高浜の駅なんか「ガリレオ真夏の方程式」で、もろにあそこで具体的な使われている作品も行ってもなにもない。もったいないなあ。何かもっと活用する方法ないかなあと思うし。それこそ県庁なんか「世界の中心で、愛を叫ぶ」で建物として使われている。あるもの、過去のを結び付けていくっていうのもやったらいいのかなという感じはしますよね。呉なんかうまいことやっていますよね、その点。そういう横のつながりってのが何となくもう少しできないのかなということは感じます。撮影の時は、フィルムコミッションと連携して、県、あるいは市町にこんなものがあるから協力してよっていう形で今までやってきましたし、今後もやりたいと思っていますし、また、私自身も、公約に愛媛ゆかりのドラマを掲げていますので、まだ実現できておりませんし、まだ諦めたわけではありませんので、夢を追いかけたいと思っています。以上です。

《補足説明》【観光スポーツ文化部】

インバウンド誘客においては、これまでも台湾映画「KANO」（作中の近藤兵太郎監督は松山市出身であり、同氏を演じた永瀬正敏氏を愛媛観光大使に委嘱）を活用した観光交流促進や、アジアで今なお人気のドラマ「東京ラブストーリー」ゆかりの梅津寺駅のPRなどを行っており、今後も、海外プロモーションの中で映画等の活用を図ってまいりたい。

国際映画祭への出品支援については、支援目的のほか、対象映画、対象映画祭、対象経費などの基準が必要となってくることから、日本映画の海外発信事業に取り組んでいる文化庁や関係団体からの情報収集を行い、県独自の取組みとしてどういった支援が可能か検討してまいりたい。

8. 双海海岸の管理について

大阪の方にいたが、結婚を機に松山に帰り、出産を機に子育てのために地元に戻って家業の飲食業で働いて生活しているが、少子高齢化も過疎化もあり地域が結構大変な状況だ。そんな中で、地域活性化に少しでも協力しようと思いグループを作って活動させていただき、その一つとして清掃活動をしている。

「シーサイド双海」という道の駅に素敵な街道ができて、丁度その隣、松山側に旧灘町海岸という海岸がある。シーサイドが火気厳禁ということもあり、夏場になると、バーベキューをするお客さんがたくさん来る。それは賑わってうれしいことだが、ただ一つ困っているのは、バーベキュー後のごみの問題。バーベキューをされるお客様は、炭やバーベキューセットなど結構ごみ

を置いて帰られる方が多く、住民は大変困っている。

我々も「ごみを持ち帰りください」と直接お願いするが、トラブルになったりして、対応が難しいと感じている。個人的にいろいろ調べてみると、ツイッターとかSNSでもたくさんあがっていて、全国的にも問題になっているということだった。この対策をやっているところも見せていただいたが、ごみの対策としては、山であれば鳥居、小さな鳥居を建てて神様の目に見られているような感覚でごみを捨てにくくさせたりとか、放置自転車については、人の目の形、目を模したポスターを貼ったりすると、人の目にさらされているようで放置できなくなるというような対策をしているところがあると聞いた。ただ景観的にはよろしくない。道路の下にある防波堤に例えばアート作品を作って描いてもらって、それを大きな一つの観光名所みたいにする。それを見に来る観光客が増えることで、そこでバーベキューをされる方がごみを捨てにくくする、ということを提案させていただきたい。

愛媛県では書道家の茂本ヒデキチ先生や、ジブリの背景を描いている先生に相談していただき、ジブリの絵を描いていただくとか、松本零士先生に999（スリーナイン）の絵を描いていただくとか、世界的に価値のあるものを残していくことで、抑止力をつくれたらなと思う。それが、観光客の招致にもつながり、地域活性化にもつながると思い提案させていただきたい。

【知事】

そのバーベキューをやるところというのは自由な空間になっているんですか。

（参加者）

一応は、我々も管轄がわからないところがありまして、海岸であれば県漁連の管轄になるのか、そういったところもわからないのですが、今のところは実質野放しというか。

【知事】

無料で。

（参加者）

無料です。

【知事】

それは、何か運営を考えた方がいいよね。

（参加者）

運営を考えるにも、管轄が分からないものですから。

【知事】

誰か分かる。どこの場所かっていうのがいまいちイメージがわからない。

（中予地方局建設部長）

今御提案のあった海岸は県管理の海岸でありまして、その前の海岸を使うのは自由使用といたしますか、自由に使ってもいいよ、と。いわゆる海水浴場と同じように自由に使っている空間になっております。

【知事】

だけど、そういう状況が生まれているんだったら、県として考えないといけないんじゃないの。例えば、大きい声でやるんですよ。ごみの放置が地元でも大問題になっています、と。この状況が続くと閉鎖も可能性がでてまいります、と。持って帰ってください、と。閉鎖という言葉を使ってバーン呼びかけるとか、何かやりようがあるんじゃないの。あるいは、スピーカーを設置して常設で「ごみは必ず持ち帰ってください」と流しておくとか。そんなにお金をかけなくてもやれることがあるんじゃないの。

（中予地方局建設部長）

今の御提案も含めまして、管理ですね、進めさせていただきたいと思います。

【知事】

これ、県の管理だと分かったんで、直ぐに動いてくださいね。それか、逆にお金のできる「やりたいんだったらお金払ってくださいね」って。

（中予地方局建設部長）

ちょっと難しいかもしれませんが、それも含めまして検討させてください。

【知事】

双海はね、たまに自転車で走りに行くんですよ。あそこは自信もっていいと思うのは、しまなみは別格として、次に来るとしたら、双海か佐田岬かという感じでみてるんですね。特にそんなに起伏があるわけじゃない、風はちょっと強いけれども、フラットに走れて、双海から長浜に至る海岸沿いの風景というのは絶景で、特に双海シーサイド公園はやっと整備も終わったんで、恋人の聖地というかね。それと何と言ってもだるま夕日の美しさは他に類を見ない、あそこに匹敵するだるま夕日はないんじゃないかなというくらい。シーサイドの手前からちょっと折れて行ったら、地元のおじいちゃんおばあちゃんがピザ窯を構えてやってくれている。あそこは人気があってね。1 回家内と飛び込みで行ったら、「予約で埋まっているからありません」。帰ろうかなと思ってたら、「1 枚だけキャンセルが出たんで、1 枚しかないけど食べる」と。「食べる、食べる」って、すごい美味しかった。自分でピザ生地を練って作るやつなんだけど、非常に思い出に残っています。

それから、僕は鉄道ファンなんで、下灘の駅は日本で最も海岸と駅が近い、日本一近いところ、そこは知る人ぞ知る空間だから、休みなんか行ったら、鉄ちゃんファンがカメラ構えて集まっているような空間で、やはり、ここもPRの仕方をもっとうまくやればもっともって人を呼び込める空間になるんじゃないかなという感じがします。

そういう意味で、折角、Uターンで帰ってこられたんで、若い発想でまちづくりに力を発揮していただきたいと思います。

今いった県営というのが分かったので、何か考えさせていただきます。

（参加者）

一ついいですか。規制にはならず、逆の発想といいますか、逆に観光とかプラスに転じれたらなど、それが未来の子どもたちのためにもなりますし、誇れるものが一つでも増えたら嬉しいですので、そういう方向で考えていただければと思います。

《補足説明》【土木部】【中予地方局】

灘町海岸のごみ対策として、中予地方局において直ちに不法投棄防止啓発看板を設置しました。

今後、日頃から自発的な清掃ボランティアを実施している地元住民団体への愛ビーチ制度への登録啓発を行い海岸清掃を呼び掛けることとし、将来的には、環境美化につながることから、地元小中学生による護岸へのペイントを含めた取組について機運醸成を図っていきたいと考えています。

また、伊予市では、将来的に、雑草の繁茂を抑制し不法投棄させにくい環境とするため、海岸の平地部への土砂搬入及び整地を検討するとのことでした。

今後とも、地元伊予市とも連携しながら同海岸の不法投棄対策に取り組んでまいります。

9. 観光業を盛り上げるイベントへの支援について

松前町内で、青年部の有志でグループを作り、町おこしをさせてもらっている。

コロナウイルスの広がりや、松前町でも、飲食店を中心に様々な企業に影響が広がっている。その中で、県の新ビジネス展開協力金を使って、「松前町がんばれスタンプラリー」というのを

させていただいた。また、持続化補助金などを利用して松前町を紹介するユーチューブチャンネル松前TVというものを立ち上げさせていただいた。愛媛県のブランド戦略課の地産地消プロモーション、去年行われたものだが、にも参加させていただき、松前町の特産品の消費拡大、飲食店さんの支援を行わせていただいた。このような事業は、やはり県等からの補助金があったからこそできた事業であり、今後もこの新しい事業に取り組む中小企業に向けての支援を継続してお願いできればと思っている。

私たちが今進めている事業として、今後、アフターコロナを見据え、非常にダメージの大きかった観光業を盛り上げていくべく「まさきクエスト」というものを、今現在準備している。これは愛媛県を一つのロールプレイングフィールドと仮定して、いろいろな市町村をめぐって、苦境、謎、珍しいものなどを、実際に探索してクエストをクリアするリアルロールプレイングゲームとなっている。何分にも小さな企業グループでやっていることなので実現できるかどうかは分からないが、支援をお願いできたらと思っている。

イベントに関係している方が非常に大きくコロナウイルスの影響が出ている。今回、国の方が進めてるワクチン検査パッケージなどを導入していただき、県からイベントに対しての後押しなども御検討いただきたいと思っている。よろしくお願ひしたい。

【知事】

はい。これ線引きがものすごく難しいですよ。イベントと一口に言っても、本当に小ぢんまりとしたイベントもあれば、大きなイベントもあれば、ジャンルも全部違う。広域のイベントもある。一緒くたにイベント応援っていう制度ってのは、なかなかそこは難しいと思うんですけども、やっぱり目的に資する活性化策の中で、例えば町が一緒になって取り組むとか、そういうものについては、応援する素地はあるんじゃないかなというふうに思っているんで、ちょっとその辺は工夫をしていただきたいなと。で、パッケージについては、これ実はどういう形になるか、よくまだわからないところがあって。で、全国にも幾つかのケース、ところで、ワクチン接種パッケージを用意したっていうのは、モデルで実証実験やったんですけど、ほんと少ないんですよ。というか、やるメリットが負担も大きくてですね。結局大都市でしかできなかったっていうこともあって、その検証をした上で、負担をできるだけ抑えた中で、地域でも地方でもできるようにするのしかどうかってのは国が決めてくると思うんで、それはよしというものであれば、積極的に取組みを図っていききたいというふうに思ってます。

で、体験型とか周遊型のストーリークイズなんかも含めた取組みをされるということなんですけど、そういったことに県ができるとすれば情報提供ですね。それに、その規模がどのようなものを目指しているのか、あるいはその有名なところをつなぎ合わせていくのかそれとも無名なところを掘り起こしていくのか、アプローチによって全然やり方が変わってくると思うんで、まずそこを固めていくっていうことが先決ではないかなと。エリアをどの程度考えられているのか、ターゲットをどういうふうにしていくのか。それに伴って、マーケティングですよ。どの層にアプローチしていくのか。それを層にアプローチするためにはどういうPR手法を考えられているのか、考えることがまだたくさんあるのかなという段階というふうな感じがしましたんで、まずコンセプトを固められてから、御相談いただけたらなというふうに思ってます。

例えば愛媛でも周遊ということだと考えると、今考えているのは、アクティブ体験をつなぎ合わせるってことは考えているんですけども、例えば西条市、さっきお話があったけど、石鎚の鎖を登るってのは他にはなかなか見られないトレッキング。それから、世界でも有数のしまなみ海道のサイクリング。それから西日本最大級の砥部のジップライン。それから松野町へ行くと、日本で有数の雪輪の滝というところを構えていますので、キャニオニング。それから南レクでは、実はこれは取材で自分がプロモーションのために乗ってきたんだけど、南レクにはですね、時速60

キロというゴーカートもありまして、350円で乗れる。ド迫力なんです。そういったところのアクティブ体験を、どうつなぎ合わせってのをどう効果的にやるかっていうのを今磨いているところで、それと同様に、砥部焼や五十崎の和紙づくりやこういった静かなアクティブが苦手な方のために、逆にそれは体力を必要としない、静かな体験の磨きこみのつなぎ合わせ、こういったものを提案しようということで、広域ですので20の市町と協力しながらですね、県としてもいろんなことを考えてる最中でございます。

そういう中で、松前ということを拠点に、広域って言うことだと、やっぱり限界はあるような気がするんで、そこでそのエリアをどうするのかなっていうのがちょっとまだ見えてきてないんで、そのあたりを練られたらいいんじゃないかなというふうに思いました。例えば大三島なんか行くと、島四国八十八ヶ所、島の中で八十八ヶ所完結されるような、これ歴史もあるんですけど、そういったことへの取組みをしたりですね、エリアというものを逆に限定する中で、その方が濃いものができる可能性もあるので、ぜひ、御検討いただけたらと思います。

それから松前でいつも思うんだけど、松前にも、何ですかね、海鮮珍味の生産量が日本一というのが松前町なんで、なんかもっとあれ出してもいいんじゃないかなって。日本中に出てますからね。そういったことも考えたらいいいんじゃないかなと思います。以上です。

(参加者)

ありがとうございました。ターゲット層のお話が出たので、今回のターゲット層はですね、小学生のお子さんがいらっしゃる親御さんを中心に、ターゲット層を考えております。有名なところと無名なところというお話が出たんですけど、もう全くもっと無名なところを紹介している形の、有名なところは県でもやられると思いますし、市町も力入ってると思いますので、無名のところを取り上げていくクエストを考えております。

【知事】

はい。そうするとね、ターゲットってのは、まさにまず地元の小学校の遠足とか、そういったところをターゲットにする。それから、もう一つは、さっきのところとつながって、悩める子育て世代の方々に楽しい1日ハイキングを提供するか何かアプローチを明確にした方が、呼び込みやすいものができるんじゃないかなという気がしますね。

(参加者)

アプローチのところは、今後特に力を入れていきたい部分で、まだ準備段階ですんで、特にアプローチの面が一番難しいかなと思っておりますので、いろいろ考えていけたらなと思っております。ありがとうございました。よろしくお願いします。